

和服文化の継承を目指した教育プログラム —ゆかた着装的の有無と伝統模様ワークの検討—

昭和学院短期大学 大矢 幸江
横浜国立大学教育学部 薩本 弥生
元横浜国立大学大学院 張 蓓蓓

1. 緒言

和服は、日本の気候や暮らしの中から生まれた衣服である。日常生活の中で発展し、畳、襖、などの和室のしつらえや和食などとともに、日本の衣食住の文化をつくり、和の生活文化をつくってきた。日常着が和服であった時代には、生地や模様で季節感を表現し、楽しんでいた¹⁾。しかし、洋装化された現代では、和服は通過儀礼や夏のイベントなどの特別な日の衣装としての着用が多く²⁾、和服に触れる機会は少ない。着装をはじめ、和服文化についての知識や技能の習得は、地域や家庭内での伝承も難しくなり、次世代への継承が危ぶまれている。子どもたちは、今も身の回りに多く存在する伝統模様に気付くことや関心を示すことは少ない。

一方、2017年3月公示の学習指導要領の中学校の技術・家庭科³⁾では、2008年改訂の際、「和服の基本的な着装を扱うこともできる」と選択であったのに対し、「日本の伝統的な衣服である和服について触れること」と必修になり、和服文化を日本の伝統文化の一つとして、その継承を目指すことが目的として明記された。筆者らは、これまでゆかたの着装を取り入れた授業実践により、ゆかた着装が、和服文化への興味関心を高める効果があること、着装体験そのものが重要となることを明らかにしている^{4)~6)}。しかし、着装を扱う授業実践は、教材の準備、授業時間数や Teaching Assistant(以下 TA と略す)の確保等、授業運営上の課題から教員1人では難しいケースがあるのに対し、着装の有無についての比較検討はされてこなかった。また、福田は伝統模様を題材にした研究を行い、「美しい伝統模様を題材とした着物文化の学習は、生徒の興味関心を引き出しやすい」⁹⁾と述べている。しかし、授業後の効果分析は、生徒の個々の考えと感想を感性的に捉えたものであり、量的な分析という点からは不十分なところがあった。

そこで、ゆかた着装の有無による授業効果を比較することとした。その際、ゆかた着装を行わない授業では、伝

統模様ワークと通過儀礼ワークに十分な時間を設け、その効果を量的に評価することとした。本研究では、2つの教育プログラム、「ゆかた着装ワーク+伝統模様ワーク」と「通過儀礼ワーク+伝統模様ワーク」の実践が、和服文化への興味関心、継承意識に及ぼす効果を、授業前後のアンケート及びワークシートの分析により明らかにし、教育現場で実践可能なプログラムの知見を得ることを目的とする。

筆者らは、「和服文化」とは、これまで日常着あるいは“ハレ”の場の衣装として日本の生活や自然と関わりながら育まれてきた日本の伝統文化の一つであり、その染色、織り、縫製、着装に関わる技術に支えられ形成されてきた文化である⁴⁾と捉えている。着装実習で扱う「ゆかた」は、きものの中でも「最もカジュアルなきもの」と位置づける。

なお、授業研究に先立ち、横浜国立大学倫理委員会に申請し、承認を得た。対象となるクラスの担当教員に研究の趣旨を伝えインフォームドコンセントを取り、生徒には担任を通じてアンケートへの協力を依頼し、写真撮影の許可を得た。論文公表に関する倫理的配慮に関しては、上記倫理委員会による「人を対象とする非医学系研究審査」を受け承認された。

2. 研究方法

(1) 授業の対象者と形態

2018年6月に国立附属A中学校1年生を対象に「ゆかた着装ワーク+伝統模様ワーク」の授業実践を行い、同年10月に私立B中学校(女子校)2年生を対象に「通過儀礼ワーク+伝統模様ワーク」の授業実践を行った。各学校とも授業実践の前後にアンケート調査を行い、A校129人(回収率96.3%)、B校の152人(回収率96.2%)から有効回答を得た。授業時間は、2時間続きの1回授業(1時間:50分)を、場所及び体制は、A校は図書室にて授業実践教員の他にTA5名体制で、B校は被服室に

和服文化の継承を目指した教育プログラム

てTA 1 名体制で行った。

対象校の生徒は、背景、生徒の特徴に違いはあるが、「授業実践を通し、日本の伝統文化の一つである和服文化への興味関心を高め、和服の良さや奥深さを感じる」という同じ目標を設定して実践を行い、和服文化への興味関心や継承意欲への効果を検証することとした。

(2) ICT 教材の活用

伝統模様ワークの実践にあたり ICT (情報通信技術) 教材である e-learning シャッフル教材を開発した¹⁰⁾。シャッフル教材は、63 種の伝統模様が重なりなくランダムに表示され、「名前」をクリックすると模様の名前、「説明文」をクリックすると模様の意味が表示される仕様の e-learning 教材である。また、「ICT 活用授業は、学力向上に十分寄与することができ、他の学力向上のための手立てや方法よりも優れた効果があった」¹¹⁾と報告されている。模様の実物提示が難しい場合や繰り返しの学習をする場合、ランダムに模様が出てくるようにプログラミングされた本教材は、模様の学習時に、視聴覚機器として有効と考える。B 校の授業実践時の際に、本教材を活用した。

(3) 授業実践の内容

ゆかた着装の有無による効果の違いを検討するために、A 校は「ゆかた着装」有りを、B 校は無しの実践を行った。「伝統模様ワーク」は、その効果を量的に評価するため A、B 両校で実践を行い、さらに B 校では、和服を着装する機会の多い通過儀礼に焦点を当てた「通過儀礼ワーク」を実施した。A 校の授業内容と時間配分を、表 1、図 1 に、B 校の授業内容と時間配分を、表 2、図 2 に示す。

授業の導入部分では、A、B 両校とも和服文化についての講義 (和服の種類、歴史等の基礎知識) を行い、生徒の関心、意欲を引き出した。続いて A 校では、「ゆかた着装ワーク」として、着つけの示範を見た後、グループに分かれて、TA 主導のもと、ゆかたの着装を各自で行った (図 3)。着装後は着つけのポイントを確認させた。ゆかたの着心地や着装感を味わいながら、「伝統模様ワーク」を実践した。ワークでは、和服に用いられる文様や柄、四季の色等の身近な日本文化を学んだ後、お宮参り用祝い着と模様カードのセットを用いて、班ごとに祝い着にある模様探しを行った (図 4、図 5)。カードの模様を見つけた人が、裏に示されている意味を読み

上げ班全員で確認する (図 6)。全てのカードが出揃ったら、祝い着を象徴する模様や、そこに込められた願いを話し合った。班としてまとめた考えを発表し、クラス全体で共有した (図 7)。最後に、ゆかたのたたみ方の示範を見た後、各自でゆかたをたたみ、授業の振り返りを行った。教員からは、宿題として「生活の中から和服の模様を探そう」が提示された。A 校は、ゆかた着装ワークに多くの時間をかけたので、伝統模様ワークの時間は少なくなった (図 1)。

表 1 A 校の授業・指導内容 (2 時間続き 1 回)

	学習内容	指導・留意事項
導入	和服文化の歴史やゆかたについて知る	和服文化への関心を喚起させる
展開 ①	男女のゆかたの着装の示範を見る 和服の各部の名称や男女の違い(おはしより、衣紋、帯の高さなど)を確認する	着装の流れを確認させる 着装のポイントを確認させる
展開 ②	グループに分かれ、TA 主導のもと各自で着装する(ゆかた着装ワーク)	細部の説明はグループごとに TA が行う
展開 ③	宮参り用の祝い着を用いて伝統模様を探し、その意味を確認、込められた願いを考える(模様ワーク)	ゲーム遊びにならないよう注意し、模様の意味を考えさせる
展開 ④	グループごとにそれぞれの祝い着について発表する	他の班の祝い着に注目させる
まとめ	ゆかたのたたみ方示範を見て、各自でたたむ授業の振り返りをする	和服の良さを考えさせる宿題を課す

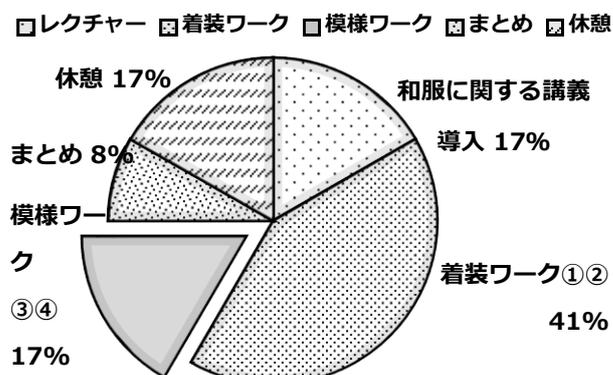


図 1 A 校の授業の構成と時間配分

和服文化の継承を目指した教育プログラム

表2 B校の授業・指導内容 (2時間続き1回)

	学習内容	指導・留意事項
導入	和服文化の歴史やゆかたについて知る	和服文化への関心を喚起させる
展開 ①	グループ (5~6人) に分かれ、通過儀礼マップの儀式に合う写真カードを置く 答え合わせして、各儀礼や和服の名称等を学習する (通過儀礼ワーク)	儀礼や TPO に応じて和服にはルールがあることを示し、確認させる
展開 ②	伝統模様の種類と意味を e-learning 教材を利用して学習する	e-learning はタブレットを利用させる
展開 ③	宮参り用の祝い着を用いて伝統模様を探し、その意味を確認、込められた願いを考える (模様ワーク)	ゲーム遊びにならないよう注意し、模様の意味を考えさせる
展開 ④	グループごとにそれぞれの祝い着について発表する	他の班の祝い着に注目させる
まとめ	祝い着に込められた思いを共有し、授業の振り返りをする	和服の良さを考えさせる

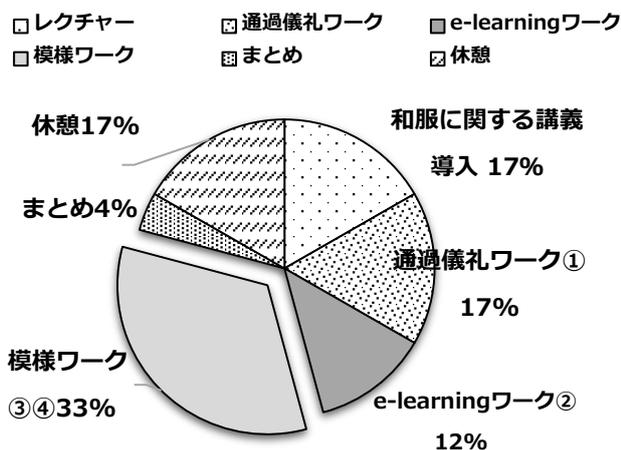


図2 B校の授業の構成と時間配分

B校では、和服文化の講義 (導入) の後に、「通過儀礼ワーク」を行った。各班 (1班: 5~6人) に配布された通過儀礼マップには人生の節目の行事が書かれている。写真カードから、その行事にふさわしい和服を考え、マップ上に配置した (図8)。配置終了後、全員で正しい

写真の位置を確認した後、通過儀礼の中から、お宮参り、七五三、成人式、結婚式、お葬式を取り上げ、行事の意味や着用する和服の種類、ルール等を講義形式で学習した。続く e-learning 教材を用いた伝統模様の学習では、タブレットを活用し、模様の名前と意味を班で学習した。模様がランダムに出現するので、クイズ形式で学ぶことができる (図9、図10)。祝い着を用いた「伝統模様ワーク」の学習方法は、A校と同様である。ワークの最後に発表を行い、クラス全員で共有した (図11、図12)。B校は、模様ワークに多くの時間をかけた実践を行った (図2)。



図3 ゆかたの着装



図4 男児用祝い着



図5 模様カードの例



図6 祝い着の模様探し



図7 模様について発表



図8 通過儀礼マップ



図9 e-learning で学習

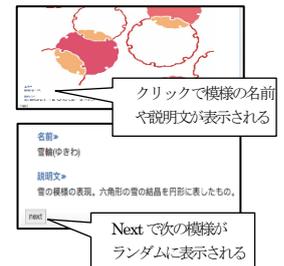


図10 e-learning 教材の例



図11 祝い着の模様探し



図12 模様について発表

和服文化の継承を目指した教育プログラム

(4) アンケート調査・ワークシートの内容

授業効果の検証のため、授業の前後で生徒を対象にしたアンケート調査を実施した。また、授業内で使用したワークシートも調査の対象とした。

授業開始前の調査では、これまでの生徒の和服との関わり実態を把握する質問を、3段階尺度（はい・わからない・いいえ）や自由記述で回答させた。和服に対する知識・興味関心、服への興味等については、表3に示す20項目を設定し、5段階尺度（1.そう思わない、2.あまりそう思わない、3.どちらでもない、4.ややそう思う、5.そう思う）にて回答させ、和服のイメージ・知識は自由記述で回答させた。

授業後の調査では、和服に対する知識・興味関心に関わる表4に示す19項目の質問を、授業前と同様の5段階尺度で回答させ、伝統文化に対する考えや感想を自由記述で回答させた。

「伝統模様ワーク」で使用したワークシートは、生徒自身が気に入った模様を一つ選び、理由とともに記入させた。さらに模様ワークを通してわかったことや発見したこと、配布された祝い着に込められた思いを自由記述で回答させた。また、B校の「e-learningワーク」時に使用したワークシートには、63個の伝統模様が印刷してある。生徒にタブレットに出現した模様の名前を記入させた（図9）。

(5) アンケートの分析方法

授業前後のアンケート調査及びA、B校共通で使用したワークシートを回収し集計した。5件法の回答は、量的に扱える間隔尺度として扱った。質問の回答結果を基礎統計量と回答割合の集計で全体的な傾向を把握した。解析ソフトには、SPSS Statistics23を使用した。有意水準は、 $p < .05$ 、 $p < .01$ 、 $p < .001$ で有意差検定をした。また、自由記述についてはキーワードを抽出し、内容的に近いものをカテゴリー分類して集計した。

3. 結果および考察

(1) 授業前の和服との関わりと意欲の実態

授業前のゆかたや和服の着装経験、着装意欲について集計した。ゆかたの着用経験は、最も多かった夏祭りはA校（男：17.1%、女：62.9%）B校（80.8%）であった。ゆかたを着装したい最多場面も、着装経験と同じく夏祭りで、A校（男：29.4%、女：56.1%）B校（89.6%）

となった。着装経験、意欲ともに男子は女子に比較して低く、授業前の興味関心は低いと思われた。ゆかた以外の和服の着装経験は、七五三が最も多く、A校（男：23.9%、女：70.4%）B校（89.1%）であり、それ以外の経験は少ない。子どもの成長を祝う通過儀礼での着装が多い。和服の着装意欲は、成人式において最も多い（A校男子：28.0%、A校女子：50.5%、B校：75.0%）。成人式における女子の振袖姿は社会現象にもなっており、そのことが女子の興味を喚起していると考えられる。また、女子ではお正月、初詣、茶道など（A校女子：約40%、B校：約50%）にて着装する意欲があり、通過儀礼だけでなく、伝統行事の場面においても和服を着装したいと考えている。

(2) A校における授業効果

1) A校の授業前調査の平均値、男女の差

A校の授業前の和服に対する知識・興味関心、服への興味等について、5段階尺度で質問した20項目から男女別に平均値を算出し、男女差の検定（ t 検定）を行った。その結果を図13に示す。

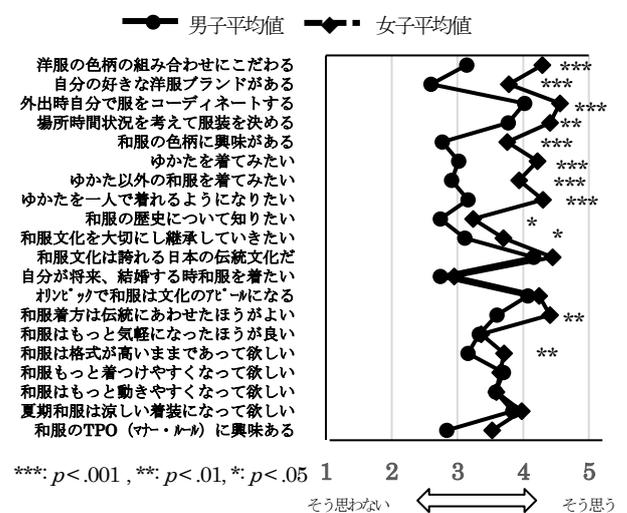


図13 A校の授業前の興味関心の男女差

男女の平均値の比較では、「和服はもっと着つけやすくなって欲しい」を除く全ての項目で、男子よりも女子の平均値が高い（有意差：12項目）。女子は、結婚式での和服着装意欲以外はすべて平均値が3以上で、色柄にこだわりがあり、好きなブランドがあるなど、和服も含めた衣服に対する興味関心が高いと言える。和服が着つけやすくなって欲しいこと、つまり和服の着つけ容易肯定意識のみ平均値が男子3.70で、女子の3.66より高かつ

和服文化の継承を目指した教育プログラム

た。和服は誇れる日本の伝統文化であるという意識は男女(男: 4.16, 女: 4.45)ともに高く、多数の生徒が和服を日本文化の象徴と考えている。自分の結婚式での和服着装意欲は、男女(男: 2.74, 女: 2.95)とも3以下で、現段階では高くなかった。

2) A校の授業前後の比較

授業後の和服に対する知識・興味関心に関わる19項目の調査について、集計を行い男女別に平均値を算出し、男女差の検定(t検定)を行った。

自分の結婚式での和服着装意欲を除くすべての項目で男女ともに平均値が3以上となった。男女間で5項目の有意差があった。そのうち、和服の色柄への興味、和服文化への学習意欲、模様への興味、和服自装意欲を質問した4項目は女子が有意に高く、和服の着つけ容易肯定意識のみ、男子が有意に高かった。男子は、実践後も女子よりも和服はもっと着やすくなってほしいと考えている。女子は、ゆかたを自分で着ること、自装意欲が最も高くなっている。

授業前後で共通する15の質問項目について、生徒全体と男女別に対応のある有意差検定(t検定)を行い、授業前後の意識の変化を調べた。全体では、12項目で授業後の平均値が高くなり、5項目で有意差があった。女子のみの授業前後のt検定からは、有意差があったのは和服の色柄への興味の1項目のみであった。もともと興味の高い女子よりも、興味が低かった男子の変化が大きいと考えられる。そこで、男子の授業前後の差を、図14に示す。

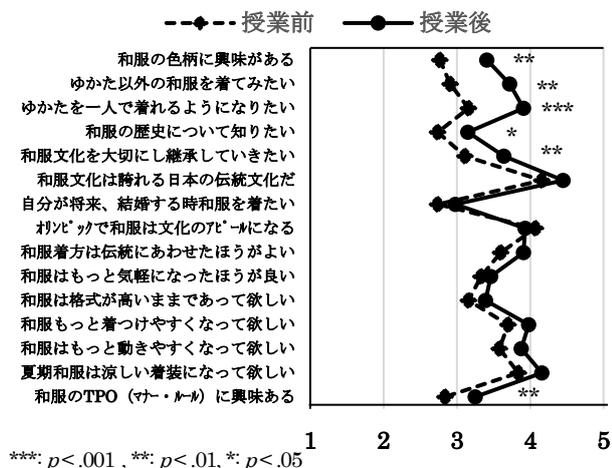


図14 A校の男子生徒の授業前後の変化

男子は授業前後で6項目において有意差が見られた。

授業後に多くの項目で平均値が上昇し、和服への興味関心は授業により男子生徒で有意に向上することがわかる。有意差のあった項目は、ゆかたへの自装意欲の向上が大きく(有意差0.1%)、和服の色柄への興味(有意差1%)、和服文化を大切にしたい気持ち(有意差1%)、歴史への興味(有意差5%)等の向上が見られる。学習を通して模様についての知識を獲得したことが、興味や意欲の喚起に影響しているのではないかと考えられた。一方、女子は増加の幅は小さかった。有意差はなかったものの和服がもっと着つけやすくなって欲しいという、着つけ容易肯定意識は、低下していた。授業後に着つけやすくなって欲しいと思わなくなった生徒の自由記述には、「ゆかた着装時には難しさを感じたが、自分でできたという達成感に魅了された。今後自分一人で着られるようになりたい。」

「着つけに時間がかかるが、着物一つ一つにいろんな意味が込められていることを知った。着物は気持ちを表せる。」という回答が見られた。着つけは難しいが、実際に着装することによって、日本文化としての価値を実感し、今のままの姿で身につけていきたいと感じたものと推察された。着つけや着心地についての感想からは、「着づらい、手間がかかる」等の否定的な感想もあった一方で、「奥が深い、永遠に続いて欲しい」等の感想も多く記述され、実際に着装する体験により様々な気持ちが引き出されたことがわかった。

(3) B校における授業効果

1) B校の授業前後の比較

B校の生徒は女子のみである。アンケート調査の集計の際、平均値を算出し授業前後で共通する項目の検定(t検定)を行った。その結果を図15に示す。

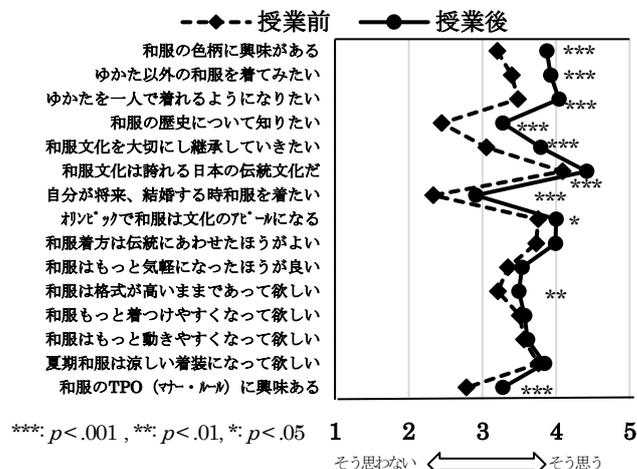


図15 B校の授業前後の変化(女子のみ)

和服文化の継承を目指した教育プログラム

授業前に比べ授業後にはすべての項目で平均値が高まり、10項目において有意差があった。和服文化への興味関心や着意欲、伝統文化への意識などの高まりが見られた。効果の詳細を明らかにするために因子分析を行う。

2) A,B 両校の授業前後アンケート項目の因子分析

授業前アンケートの 20 項目に対して、主因子法・Promax 回転による因子分析を行い、 α 係数を算出し内的整合性を検討したところ、4 因子が妥当であると考えられた。因子分析を行った最終的な結果と因子負荷量を表 3 に示す。第 1 因子は 6 項目で構成されており、「ゆかたを着てみたい」「和服を着てみたい」など、和服への興味や着意にかかわる項目が高い負荷量を示していた。そこで「着意興味意欲」と命名した。第 2 因子は 4 項目で構成されており、「和服はもっと動きやすくなって欲しい」など、和服の機能性に関わる項目が高い負荷量を示していた。そこで「機能性重視」と命名した。第 3 因子は 4 項目で構成されており、「好きな洋服のブランドがある」など、ファッションへの興味関心にかかわる項目が高い負荷量を示していた。そこで「ファッション興味」と命名した。第 4 因子は 6 項目で構成されており、「和服文化を大切に継承していきたい」など、和服を継承発展したいという意欲に関わる項目が高い負荷量を示していた。そこで「継承発展意欲」と命名した。

続いて、授業後のアンケートの 19 項目に対しても、主因子法・Promax 回転による因子分析を行い、内的整合性の検討を行ったところ、4 因子が妥当であると考えられた。最終的な因子分析の結果を表 4 に示す。第 1 因子は 7 項目で構成されており、「和服文化を大切に継承していきたい」や和服の着意などにかかわる項目が高い負荷量を示していた。そこで「着意継承意欲」と命名した。第 2 因子は 4 項目で構成されており、「和服はもっと着つけやすくなって欲しい」など、和服の機能性にかかわる項目が高い負荷量を示していた。そこで「機能性重視」と命名した。第 3 因子は 5 項目で構成されており、「和服についてもっと知りたい」など、伝統文化への興味にかかわる項目が高い負荷量を示していた。そこで「伝統文化興味」と命名した。第 4 因子は 3 項目で構成されており、「和服の色柄に興味がある」など、和服の基礎知識や模様への興味にかかわる項目が高い負荷量を示していた。そこで「色柄興味」と命名した。

表 3 授業前調査の因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	因子名
ゆかた以外の和服を着てみたい	.82	.18	.07	.35	着意興味意欲
ゆかたを一人で着られるようになりたい	.81	.21	.17	.38	
ゆかたを着てみたい	.70	.22	.25	.32	
和服の色柄に興味がある	.68	.09	.24	.27	
和服文化を大切に継承していきたい	.68	.11	.03	.65	
和服の歴史について知りたい	.63	.11	-.10	.54	
和服はもっと動きやすくなって欲しい	.09	.86	-.09	.14	機能性重視
和服もって着つけやすくなって欲しい	.20	.84	-.03	.23	
夏期和服は涼しい着装になって欲しい	.23	.74	.02	.24	
和服はもっと気軽になったほうが良い	.35	.63	.11	.12	
洋服の色柄の組み合わせにこだわる	.23	.01	.80	-.05	ファッション興味
外出時自分で服をコーディネートする	.16	.02	.70	.27	
場所時間状況を考えて服装を決める	.10	-.06	.64	.11	
自分の好きな洋服ブランドがある	.16	.02	.55	.08	
オリンピックで和服は日本文化のアピールになる	.36	.17	.17	.81	継承発展意欲
和服文化は誇れる日本の伝統文化だ	.53	.15	.16	.71	
和服は格式が高いままであって欲しい	.16	.15	-.02	.43	
和服のTPO(マナー・ルール)に興味ある	.53	.21	.05	.35	
自分が将来、結婚する時和服を着たい	.39	.09	.04	.35	
和服着方は伝統にあわせたほうがよい	.44	.16	.10	.35	

3) B 校低群の授業後の変化

B 校の授業前後の t 検定結果 (図 15) と授業前因子分析 (表 3) から、授業前後で有意差があった項目は、因子分析の「【授業前】着意興味意欲」因子の項目であった。そこで、この因子の因子得点を基準に、「着意興味意欲 $\geq .00$ 」を「高群」、「着意興味意欲 $< .00$ 」を「低群」として、2 つの群に分け、高群、低群別に授業前後の有意差検定 (t 検定) を行った。低群の結果を図 16 に示す。

低群の授業前の平均値は、着意への興味や継承への意欲など、多くの項目で平均値が 3 以下であったが、授業後には、結婚式での和服着意欲を除き、3 以上と高くなり、有意差も多く見られた。全体 (図 15) の授業効果は、低群のみの効果の特徴と一致し、低群ではその傾向が一層顕著になっている。和服文化や伝統文化に対する

和服文化の継承を目指した教育プログラム

表 4 授業後調査の因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	因子名
和服文化は誇れる日本の伝統文化だ	.78	.03	.40	.37	着装継承意欲
和服文化を大切に継承していきたい	.77	.03	.65	.52	
ゆかた以外の和服を着てみたい	.64	.17	.51	.58	
オリンピックで和服は日本文化のアピールになる	.63	.05	.46	.38	
ゆかたを一人で着られるようになりたい	.56	.21	.37	.38	
和服は格式が高いままであって欲しい	.43	.17	.34	.28	
和服着方は伝統にあわせたほうがよい	.28	.06	.18	.24	
和服もっと着つけやすくなって欲しい	.16	.89	.13	.21	機能性重視
和服はもっと動きやすくなって欲しい	-.04	.82	.05	-.05	
夏期和服は涼しい着装になって欲しい	.13	.81	.10	.24	
和服はもっと気軽になったほうが良い	.30	.62	.34	.41	
和服の歴史について知りたい	.53	.07	.86	.62	伝統文化興味
和服についてもっと知りたい	.60	.10	.85	.84	
日本の伝統文化について興味がある	.53	.21	.74	.68	
和服のTPO(マナー・ルール)に興味ある	.52	.19	.69	.51	
自分が将来、結婚する時和服を着たい	.36	.08	.57	.36	
和服の色柄に興味がある	.43	.23	.60	.86	色柄興味
和服の模様に興味があった	.51	.15	.61	.84	
和服に関する知識が広がった	.50	.10	.46	.63	

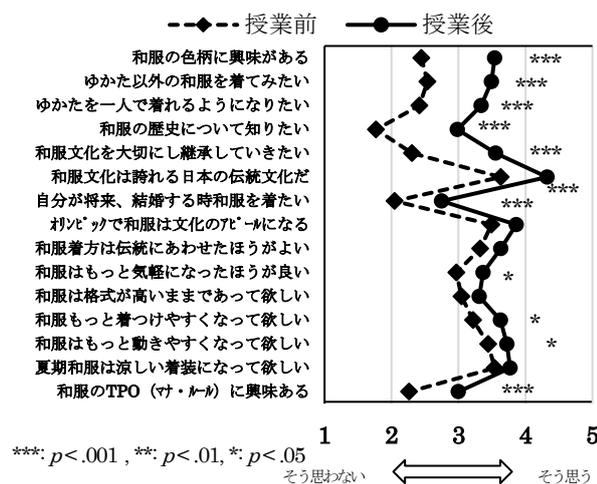


図 16 B校の授業前後の変化 (低群)

興味関心、模様ワークによる色柄、模様への関心の向上という、全体で見られた効果を押し上げたのは低群の生徒の変化によるものと考えられる。また、和服が「着つけやすくなって欲しい」や「動きやすくなって欲しい」

などの「機能性重視」についても有意差が認められ、和服は「気楽に着られるものになって欲しい」という気持ちを持ったようである。

4) B校高群の授業後の変化

B校の「【授業前】 着装興味意欲」因子の高群による授業前後の有意差検定 (t 検定) を行った結果を図 17 に示す。

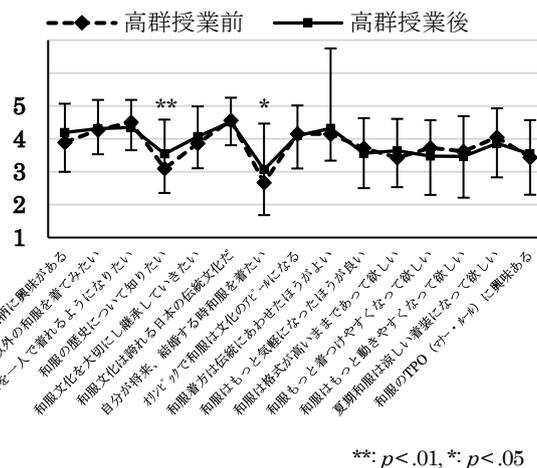


図 17 B校の授業前後の変化 (高群)

授業前から3以上と平均値の高かった高群では、授業後の平均値も高く、有意差は、和服の歴史を知りたいと、自分の結婚式での和服着意欲のみであった。一方、有意差はなかったものの、授業後の平均値に低下が見られたのが、和服が「着つけやすくなって欲しい」「動きやすくなって欲しい」「涼しくなってほしい」などの「機能性重視」に関わる項目であった。また、「和服の着方は伝統にあわせたほうがよい」は、授業後の標準偏差(2.43)が大きく、考えにばらつきが見られる。「和服は今のままがいい」と「気軽になって欲しい」の、相反する考えが共存していた。「伝統文化である和服をそのまま残したい」と「気楽に着たい」という、両方の思いがあると推察された。

(4) A, B校における授業効果の比較

ゆかたの着装の有無や、模様ワーク内容の差による効果の検証を、 t 検定や相関分析等の解析を踏まえ、共分散構造分析(パス解析)によってA, B校を比較、検討した。因子分析の結果から得られた授業前4因子と授業後4因子を潜在変数とし、各因子を構成する質問(授業前20項目、授業後19項目)を観察変数としてパス解析を行っ

和服文化の継承を目指した教育プログラム

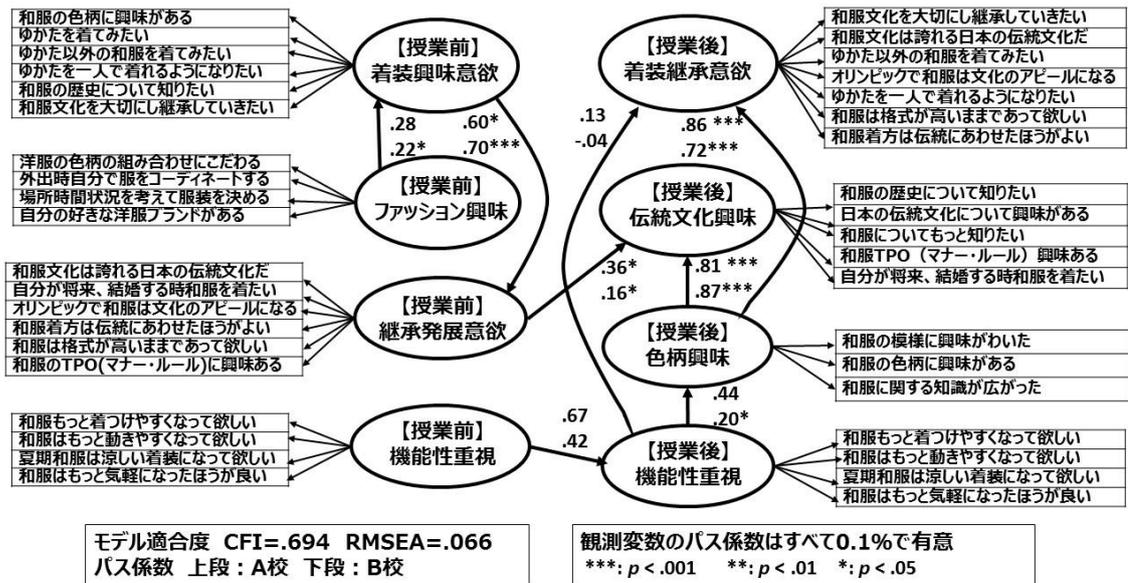


図 18 A、B校の多母集団の同時分析結果

た。潜在変数のうち、「【授業後】 着装継承意欲」は他の潜在変数からの結果として高まると仮定したので、パスの矢印を受ける方向としてモデルを作成し解析を行った。A校は男女共学校で、B校は女子校であった。性差による違いの影響を考慮し、よりの確な結果を得るために、対象を女子のみ抽出して、パス解析を行った。A、B校を多母集団の同時分析にて解析を行った結果を図 18 に示す。パス解析の適合度指数は、CFI=0.694、RMSEA=0.066 をそれぞれ示し、適合度指数は妥当と言えた。また、潜在変数から観測変数へのパス係数は、A校が 0.33~0.86、B校が 0.40~0.97(図中のパス係数は煩雑さを考慮して省略)となり、パス係数はすべて有意であった。

1) A、B両校における特徴

A、B両校とも、【授業後】色柄興味から【授業後】着装継承意欲へのパス係数(A:0.86,B:0.72)が有意 ($p < 0.001$) であることから、模様ワークの実践により、和服の色柄興味が高まるほど、和服の着装と和服文化を継承する意欲が高まることが示唆された。また、【授業後】色柄興味から、【授業後】伝統文化興味へのパス(A:0.81,B:0.87)も有意 ($p < 0.001$) に高く、和服の色柄興味は、伝統文化への興味関心を高めることにつながることも示唆された。さらに、【授業前】着装興味意欲から【授業前】継承発展意欲へのパス係数が有意 (A: $p < 0.05$, B: $p < 0.001$)、【授業前】継承発展意欲から【授業後】伝統文化興味へのパス係数が有意 ($p < 0.05$) である

ことから、もともと着装や和服文化に興味関心が高いことが、授業後の伝統文化興味や継承意欲に影響していることも示された。

【授業前】機能性重視から【授業後】機能性重視と、【授業後】機能性重視から【授業後】着装継承意欲は、両校ともに有意差はないが、ゆかたを着装した A 校の方が、パス係数が大きい。ゆかたを着装する事によって、着つけの難しさや動きづらさなどの着心地を体感し、もっと動きやすくなって欲しい、気軽になって欲しい、という考えに影響した可能性が考えられた。前述の A 校女子の t 検定では「今のままの姿で身につけたい」と考える生徒の存在が示された。いずれも有意差はないので、生徒の考えにばらつきがあると見られる。すなわち、着装の体験後には、より機能性を重視する人と、動きにくい立ち居振る舞いの変化を感じ肯定する人がいるようである。

2) A校、B校の比較

【授業後】色柄興味から【授業後】着装継承意欲や【授業後】色柄興味から【授業後】伝統文化興味へのパスは両校とも効果が有意 ($p < 0.001$) に大きかった。そこで、両校の効果の相違を検討するため、パラメータ間の差の検定を行った。その結果を表 5 に示す。

表 5 の 2 つのパス係数間の数値は、絶対値が 1.96 以上であれば、5%水準で有意、絶対値 2.33 以上であれば 1%水準で有意、絶対値 2.58 以上ならば 0.1%水準で有意と判断される。両校のパラメータ比較では、【授業前】機能性重視から【授業後】機能性重視は 0.1%水準、【授

和服文化の継承を目指した教育プログラム

表5 A、B校間のパラメータの一対比較

前_ファッション興味	→前_着装興味意欲	0.381
前_着装興味意欲	→前_継承発展意欲	0.621
前_機能性重視	→後_機能性重視	2.648 ***
後_機能性重視	→後_色柄興味	-1.141
後_機能性重視	→後_伝統文化興味	-1.631
後_色柄興味	→後_着装継承意欲	-2.356 **
後_色柄興味	→後_伝統文化興味	0.995

***: $p < .001$, **: $p < .01$

業後】色柄興味から【授業後】着装継承意欲は1%水準で、有意差があると解釈された。

【授業前】機能性重視から【授業後】機能性重視のパス係数(A:0.67, B:0.42)は、有意ではなかったが、A校とB校間の比較では、ゆかた着装無しのB校と比較し、有りのA校は、授業前後における機能性重視との関連性がB校より有意に高く、着つけ体験により和服の機能性を高く求める傾向があると言えた。

【授業後】色柄興味から【授業後】着装継承意欲のパス係数は、ともに有意なパス係数(A:0.86, B:0.72)が見られたが、A校とB校間の比較では、A校の方が有意に授業後に和服の着装や和服文化の継承に効果が高いことが示された。

共分散構造分析による因子間相互の関連性の分析から、両校で実践した模様ワークは、色柄への興味を高め、和服文化への興味関心を高めることや継承への意欲を高めることが明らかとなった。さらに、ゆかたの着装を行うことは、和服の機能性を体感的に学べ、文化面の学習と両立することができた。模様ワークにとどまる学習は、文化面の学習として効果はあったが、体験的な学びを加えることが出来たらさらに効果が高まったのではないかと推察された。

(5) アンケートの自由記述及びワークシート記述

アンケート調査の自由記述及び、授業内で使用したワークシートに記載された内容から、典型的な例を挙げる。

1) 伝統模様ワーク、通過儀礼ワーク

和服の模様について多く見られた記述が、「初めて知った、驚いた、たくさんの種類の模様の意味をもっと知りたい」など興味関心の喚起に関連する内容であった。「着物一つにいろんな意味が込められ、男子と女子で意

味に違いがあることに驚いた」等、模様に興味があること、たくさんの種類の模様があることに驚き、面白さを感じていた。「これまで何気なく着ていたゆかたの模様に大切な意味があることを知り、学びを深めたい」と意欲を高めていた。通過儀礼ワークについても、驚きの記述が最も多かった。特に「男性の正装がどんな行事でも同じ」ことに驚きを感じ、もっと知りたいと回答している。男性と女性の違いに関心が集中したようである。

2) ゆかたの着装と和服の着装経験

ゆかたを着装して、「美しい」と感じていた生徒がいる一方で、「難しい、動きにくい」など機能性に対して否定的な言葉も見られた。「着ることで、和服の特徴がわかった」というように、着装により和服への理解を深めた記述もあった。動きづらさを感じつつも、和服を日本の大切な文化だという認識を持った、という記述が見られた。ゆかたや和服を着用したことがないという未経験者は、和服についての知識が乏しく、授業前の興味関心も低いことがわかった。

3) 伝統文化について

日本の伝統文化に関して、「和服は海外にはない、日本独自の文化だと思うから、伝統を受け継ぐのは大事なこと」「格式があって、貴重な服なのでこれからも伝統文化として継承していきたい」という記述があり、日本らしさや歴史の重みを感じていた。生徒は和服を日本の伝統文化であると認識していて、受け継ぐ意欲を高めていることがわかった。和服に触れる機会や知識がないために、実践意欲が低かった生徒であっても、一連の授業を通じて知識を獲得し、和服の良さを感じたことから、授業後には意欲が高まったと考えられた。授業を通してゆかたの着装を体験し、模様を丹念に観察し、知識を獲得できたことが、和服の良さを感じることにつながり、興味関心が向上していったと推察された。和服を日本の伝統文化と認識し、今後の着装意欲にもつながっていた。

4. 結論

本研究では、和服文化への興味関心や継承する意識を高める効果をねらい、2つの教育プログラム、「ゆかた着装ワーク+伝統模様ワーク」と「通過儀礼ワーク+伝統模様ワーク」の実践を、中学生を対象に行った。教育プログラムの実践により、和服文化への興味関心、継承意識に及ぼす効果を、授業前後のアンケート及びワークシートの分析により明らかにし、教育現場で実践可能な

和服文化の継承を目指した教育プログラム

プログラムの知見を得ることを目的とした。結果は次のとおりである。

- 1) ゆかた着装のワークがある方が、無しの実践に比べて和服への理解が深められ、和服着装への意欲や和服文化を継承する意欲が有意に高くなり、ゆかた着装の体験的学びの重要性が示された。
- 2) 両校とも模様ワークの実践により、和服の模様・色柄への興味関心が向上し、さらに和服文化を誇りに思い、継承していきたい気持ちが高まることや、伝統文化への興味関心が高まることが示唆された。
- 3) 授業前に興味関心が低かった低群の生徒や男子生徒は、知識を獲得したことにより、和服文化や伝統文化への興味関心が喚起され、授業後の効果が有意に高くなった。

以上のように、2つの教育プログラムの検証により、本教育プログラムの実践が、生徒の和服文化への興味関心や継承意識の向上に有効であること、ゆかた着装の重要性が示された。教育現場の様々な教育環境により、ゆかた着装に制約があったとしても、通過儀礼や模様ワーク等、文化面に特化したプログラムの実践により和服文化への興味関心、継承意欲の向上に有効であることが示唆された。

謝 辞

本研究の授業実践に当たり、多くのお力添えとご協力いただいた横浜国立大学附属横浜中学校の池岡有紀先生、捜真女学校の千葉眞智子先生に心から感謝申し上げます。

また、ICT教材の開発、教室環境の整備にあたりご協力いただいた共栄大学の伊藤大河先生、伝統模様ワーク、通過儀礼ワークを考案された福田幼子氏に感謝申し上げます。そして、ATとして協力いただいた薩本研究室のメンバー、および、調査に協力いただいた生徒さんに心から感謝する。

【引用・参考文献】

- 1) 道明美保子. すぐわかるきものの美. 東京美術, 2005
- 2) 伊藤元重, 矢嶋孝敏. きもの文化と日本. 日経プレミアシリーズ, 2016, 14-254
- 3) 文部科学省. 中学校学習指導要 (2017)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf

- 4) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子. 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発—「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信—. 服飾文化共同研究最終報告書. 2012, 2-119.
- 5) 薩本弥生, 川端博子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 扇澤美千子, 堀内かおる, 井上裕光, 葛川幸恵. ゆかたの着装体験を含む教育プログラム開発をめざした中学校技術・家庭科での授業実践. 家教誌. 2013, Vol.56, No.1, 14-22.
- 6) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子. きもの文化の伝承をめざしたゆかたの着装を含む教育プログラム開発のための中学校技術・家庭科での授業実践—教育学部の大学生アシスタントティーチャー(AT)を活用した試みから—. 横浜国立大学教育デザイン研究. 2013, Vol.4, 35-44.
- 7) 川端博子, 薩本弥生, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 扇澤美千子, 堀内かおる, 井上裕光. ゆかたの着装を題材とする授業実践の試み. 家教誌. 2013, Vol.56, No.2, 78-89.
- 8) 大矢幸江, 薩本弥生. ゆかた着装授業と着装後ワークがきもの文化への興味関心に及ぼす効果. 家政誌. 2018, Vol.69, No.1, 1-17.
- 9) 福田幼子, 薩本弥生. 着物文化を伝承する家庭科の教育プログラムの開発-中学生を対象に伝統模様を題材として-. 横浜国立大学教育学部紀要. I, 教育科学. 2019, Vol.2, 72-94.
- 10) 和服の模様 e-learning シャッフル教材.
<http://kimono-bunka.ynu.ac.jp/kimono-pattern-work/index.html>
- 11) 豊田充崇, 野中陽一, 望月純子. ICT活用授業による学力向上効果の検証-長期・常時のICT活用授業における子ども・教師の変容を探る-. 和歌山大学教育学部教育実践専攻総合センター紀要. 2007, No.17, 15-22